



Title	1911年トリノ万国博覧会と平山英三
Author(s)	天貝, 義教
Citation	デザイン理論. 2021, 78, p. 5-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83328
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1911年トリノ万国博覧会と平山英三

天 貝 義 教

キーワード

1911年トリノ万国博覧会, 平山英三, 商品改良会, 安田禄造
Turin International Exhibition 1911, Hirayama Eizo, Shohinkairyō-kai,
Yasuda Rokuzo

- 1 はじめに
- 2 トリノ博への平山英三の派遣
- 3 トリノ博における平山英三のウィーン旅行
- 4 平山英三のトリノ博視察談話
- 5 第六回商品改良会における平山英三の出品講評
- 6 おわりに

1 はじめに

明治初期（1870年代）に日本人としてはじめてオーストリア帝国の首都ウィーンのクンストゲヴェルベシューレ（Kunstgewerbeschule, 現在の Universität für angewandte Kunst）に学んだ平山英三（安政2年～大正3年, 1855-1914）は、明治30年（1897）から明治41年（1908）まで工業図案の高等教育にたずさわり、その後、明治44年（1911）にイタリア王国のトリノ市で開催された万国博覧会（以下トリノ博と表記）に派遣された。トリノ博と平山英三の関係については、緒方康二氏の1980年代の論文¹において言及されているが、この万国博覧会への日本の参加は、従来、デザイン史の研究において、とくに注目されてはいなかった。しかしながら緒方康二氏が指摘しているように、この博覧会について平山は詳細な日記を残しており²、そこには、同じく現地に派遣されていた彫刻家の長沼守敬との交流をふくめ、参加各国と各団体の展示品の審査や、トリノ市内の散策、さらに博覧会事務に関連したヨーロッパの主要都市間の移動にいたるまで、ほぼ毎日の行動が記録されている。それによれば、平山は2週間ほどのウィーンへの小旅行をおこなっており、当時ウィーンのクンストゲヴェルベシューレに留学していた、後の東京高等工芸学校校長安田禄造がウィーン滞在中の平山を一度ならず訪ねていたことが読みとれる。またトリノ博からの帰国後、平山は、博覧会についての談話や輸出振興に関する意匠図案の改良策を発表し、大正元年（1912）

本稿は、第55回大会（2013年7月21日、福井工業大学）での発表にもとづく。

に開催された第六回商品改良会では審査長を務め、輸出向けの陶磁器・漆器・客室用洋風家具などの図案について講評を残している。本論では、平山英三の日記を手がかりにして、ウィーン旅行を含むトリノ博における平山のヨーロッパ体験を跡づけ、トリノ博後の平山の論説との関連を明らかにしたい。

2 トリノ博への平山英三の派遣

明治44年(1911)のトリノ博(図1)は、イタリア王国建国五十周年を記念して開催されたものであり、トリノとは別にローマにおいても博覧会場が設置されていた。この万国博覧会への日本の参加については、現在、外務省外交史料館所蔵の『伊国羅馬市及チュラン市ニ於テ万国博覧会開設一件』と、大正元年(1912)に発行された伊太利万国博覧会出品協会の編集による『伊太利万国博覧会出品協会事務報告』によって知ることができる。この報告書によれば、明治41年(1908)の3月に在日本イタリア大使を通じて万国博覧会への日本の参同の招請がなされ、翌明治42年(1909)8月に日本政府は、帝国議会の協賛を経て参同することを決定した。そのさい、参同事業の進行と監督のために事務官を任命するとともに、政府の監督下に出品協会を設立させることとなった。協会の名称は「伊太利万国博覧会出品協会」であり、明治43年(1910)4月に設立が認可され、協会の会長に男爵武井守正、顧問に平山成信、平山英三が理事長となり、長沼守敬と山本安三郎の二名が理事に任命された³。平山英三は出品協会の理事長としてトリノに派遣されたのである。

同報告書によれば、当時の万国博覧会の日本語名称は、「一千九百十一年伊太利建国記念万



図1 トリノ博「広告図案」

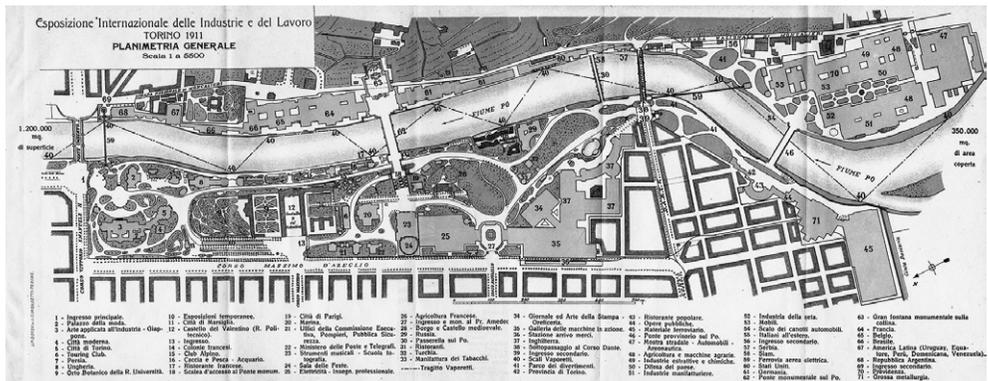


図2 トリノ博 全体平面図(Planimetria Generale)

国博覧会」であり、イタリア王国の旧首都であったトリノ市と新首都であるローマ市の二都市が会場となった。トリノでは、「工業及ヒ労働ニ関スル表章物」を展示する「チュラン万国産業博覧会」が開催され、これが一般にトリノ万国博覧会と呼ばれるものである⁴。一方、ローマでは、主として「歴史考古学及ヒ美術ニ関スルモノ」を展示する「羅馬万国美術博覧会」が開催された⁵。

日本はローマ会場に特別館を建設し、日本画・西洋画・彫塑とならんで古美術品⁶を展示することとなったが、トリノ市の東部を南北に流れるポー川沿いのサン・サルヴァーリオ地区のヴァレンティーノ公園を敷地としたトリノの博覧会場（図2）では、イタリア側との折衝の結果、独立した日本館を建設せず、正門を通りすぐ右手側に建設された応用美術館（図3）に日本部を設置することとなった。またポー川の対岸に建設された会場南端に位置する工業館・農業館の一部を日本部の展示室とし、応用美術館と工業館に日本の事務室が開設された。トリノ博の公式ガイドブック⁷に折り込まれた全体平面図（図2）には、“Arte applicata all' industria – Giappone”（応用美術館—日本部）との表示がみられ、日本側の報告書によれば、応用美術館のおよそ半分程度を占めた日本部の陳列（図4）は、以下のように七つの項目に区分されていた⁸。「I 七宝・銅鉄器・陶磁器, II 刺繍品, III 絹物・刺繍品・真珠, IV 陶磁器, V 印刷物・金銀錫器・鼈甲・ハンケチ・象牙・漆器, VI 漆器・銅器, VII 銅器」

出品協会の理事長としてトリノに赴任した平山英三は、小型の手帳三冊にわたる日記を残しており、そこには、明治43年（1910）12月27日に、「一金百九十六円四十一銭」で正金銀行において「英貨廿ポンド」を買い入れたとの記述にはじまり、明治45年（1912）2月20日の「新橋ニハ子供等其他親類及出品協会員特許局員ノ諸君等多数ノ出迎人アリタリ 各位ニ挨拶ヲ為シ直ニ留守宅ヨリ来リシ迎ヒノ人車ニテ帰宅ス」との記述におわるまでのトリノ博赴任について、毎日の出来事が詳細に記録されている。

それによれば、平山は、明治44年（1911）1月6日に新橋を発し、翌7日、神戸から「郵船熱田丸」に乗船して、2月20日にマルセイユ港に到着、汽車にて2月23日に博覧会開催地の



Esposizione Internazionale 1911. Industrie artistiche.
図3 応用美術館 (Palazzo delle Industrie Artistiche)

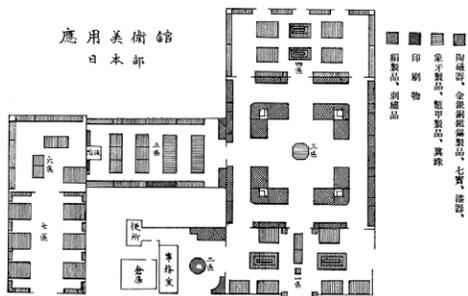


図4 応用美術館内 日本部



図5 日本部関係者記念写真 前列右より四人目が平山英三
(日記によれば11月17日に応用美術館正面入口前で撮影された。)

トリノに到着し、ポルタ・ヌオーヴァ (Porta Nuova) 近傍のホテルに投宿した。同月28日にホテルから、会場近くの住宅地であるベルトレット街42番地 (Via Claudio Luigi Berthollet 42) に入居していた出品協会事務所に移っている⁹。この事務所は先発した出品協会理事の長沼守敬によって賃貸契約がなされたものであり、博覧会会期中、平山は長沼と現地の博物館や美術館を訪れるなど公私ともに行動していたことが日記から読み取れる。博覧会は4月29日に開会し、11月19日に閉会したが、博覧会の終了後、平山は、明治45年(1912)1月1日にトリノを出発して、順にミラノ、ベルリン、パリ、リヨンなどに滞在しながら、1月12日にマルセイユに移動し、明治45年(1912)1月14日にマルセイユ港から「郵船三島丸」に乗船、2月19日に神戸港に到着、同日三ノ宮駅発の汽車に乗車し、翌20日午前9時に新橋駅に到着し赴任を終えている。

博覧会期間中に主としてトリノに滞在した平山英三は、ほぼ毎日トリノ会場の応用美術館に開設された日本事務室に通い、ときに「乗合自動車」を使って工業館に移動したり、審査員として各展示館の視察などしているが、4月21日から同月23日まで、5月11日から同月17日までローマ会場を訪れていた¹⁰。また8月2日から16日にかけてはブタペストを含むウィーンへの小旅行をおこなっている。

3 トリノ博における平山英三のウィーン旅行

日記によれば、8月2日にトリノを出発した平山は、スイスのルツェルン、ドイツのミュンヘンを経て8月8日にウィーンに到着し、フランツ・ヨーゼフ・カイ地区の「ホテル、メトロポール」に投宿した。翌9日の午前「スタットパーク等」を散歩し、午後日本大使館において、当時ウィーンのクストゲヴェルベシュレーに留学していた東京高等工業学校工業

図案科講師安田禄造の住所を確認し、その夜に安田が平山のホテルを訪れ、二人は談話したとある。平山の日記の第3冊目の末尾近くには、「R. Yasuda Wien XIII Onno-Kloppg.9 Österreich」と読める書き込み(図6)があるが、安田禄造のウィーンの住所と思われる。

A handwritten note in cursive script, likely a postcard or a note from Yasuda Ryozo. The text reads: "R. Yasuda Wien XIII Onno-Kloppg. 9 Österreich". The handwriting is elegant and somewhat slanted. The word "Österreich" is written on a separate line below the others.

図6 安田禄造の住所と思われる書き込み

翌日の10日の朝にも、安田は平山を訪ねている。日記では、「相伴ッテ市街ヲ散策シ美術工業博物館(昔時余ノ入学シ居リタル学校ノ附属シタル博物館ナリ)ノ新築建増ニ係ル部分(旧本館ハ此日閉館シアリ)ヲ一覽ス」とあり、その展示品の装飾様式については、「其入りタル所ノ一室ニハ主トシテ学校ノ図案ヨリ成レル銀器、玻璃器、貝細工器、革製手提等ノ小品ヲ陳列シアリ、其装飾ハ重ニ東洋的ノ様式ニシテ一種一雅致ヲ具フルモノナリ」と報告している。この記述にみる「美術工業博物館」とは、当時のDas k.k. Österreichische Museum für Kunst und industrie(現在のMAK-Museum für angewandte Kunst)、「新築建増ニ係ル部分」とは1906年に竣工したルートヴィヒ・バウマンの設計による新館であり、「学校」とは、かつて平山英三が留学し、当時安田が留学していたクンストゲヴェルベシュエレのことである。この日は、平山と安田は、同館からさらにホッフブルクへ向かい、「内外装飾ノ善美」を尽くしている自然史博物館、「純ゴシック式」のラートハウス、「全体希臘式ノ建築」である議院などリンクシュトラセ沿いの公共建築を訪れ、11日にも二人はともに美術史博物館やシェーンブルン宮を見学している。美術史博物館については、平山は「内部ノ装飾ノ美」は自然史博物館に比べ「一層美ヲ尽クセリ」と印象を記している。

翌12日に平山はハンガリーの首都ブタペストに向かい13日に再びウィーンに戻って、14日には、1873年の万国博覧会場であった「プラーテル」公園を散歩した後、「クンスト、ゲヴェルベ、ムゼウム」を訪れたが閉館しており、附属の学校について、「プロフェッソル、バイエル氏尚在ルヤ否ヤムゼウムノ門番ニ尋ネタル所今ハ已ニ此ヲ去レリト云フ」と、かつての恩師の近況を尋ねたことが記録されている。「クンスト、ゲヴェルベ、ムゼウム」とは、「美術工業博物館」のことであり、「プロフェッソル、バイエル氏」とは、平山英三の在籍時に、講師(Lehrer)として透視図法・投影・陰影図法を担当していたOskar Beyerのことである¹¹。翌8月15日に平山はウィーン南駅からトリノへ向かい16日の夜にトリノにもどっている。

ウィーンにおいて平山と安田が目にした「銀器、玻璃器、貝細工器、革製手提等ノ小品」については、トリノ博前後の時期に、イギリスの雑誌The Studio誌が特集したクンストゲヴェルベシュエレ、美術工業博物館、オーストリア帝国内の工芸専門学校(die

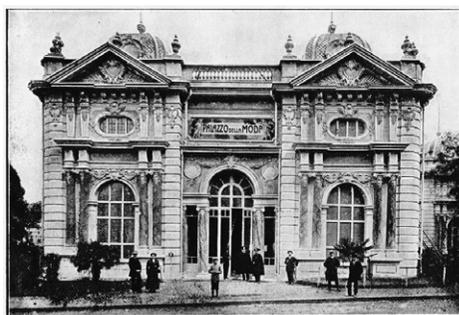
Kunstgewerbliche Fachschule), ウィーン工房に関する一連の記事¹²を通じて英語圏にも紹介されており, 広く国際的に注目されていたことが確認できる。それらの記事によれば, クンストゲヴェルベシューレの教官ヨーゼフ・ホフマンとコロマン・モーザー, その同僚たちや教え子たちの作品には, 「詩的 (poetic)」でありながら「論理的 (logical)」でもある「多才さ (versatility)」が指摘されており¹³, 平山が日記に記した「一種一雅致」を備えた製品の特徴を読み取ることができよう。

4 平山英三のトリノ博視察談話

トリノ博から帰国した平山は博覧会についていくつかの談話を発表しているが, 「伊太利万国博覧会視察談」と題された論説¹⁴では, トリノとローマを会場とした万国博覧会の開催主旨をふくめ博覧会全般を話題とし, そのなかで日本ならびに外国の出品の「意匠上の点」について報告している。それによれば, ローマ会場の博覧会では, 絵画と彫刻を中心とした日本の出品は「存外評判も好く」, 日本館は「常に観覧人が多かった」が, しかしローマ会場は, 「チュリン博覧会のような好景気にはわかかなかった」という。一方で, トリノ会場では, 「製作工業品応用美術品農業及水産品等」からなる日本の出品に対する一般の評判は「至て好評」であった。その売行きも「存外好成績」であったが, 主として価格の低廉なものが売れ, 高価なものは「多くは売れなかった」という。なかでも, 平山によれば, 出品数のもっとも多かった陶磁器の売り高がもっとも多く, とくに一般の観客の注目を惹いたものは刺繍であった。陶磁器のなかでは, 「茶器珈琲器等」の「実用向き」のものがもっぱら売れ, 花瓶・香炉などの室内装飾品は比較的多くは売れず, 「美術的陶磁器又は七宝」のような高価な品の売行きは「甚だ宜くありませんでした」と報告されている。

出品協会の事務報告によれば, 安価なものを中心として磁製茶器の売り上げがもっともよく, とくに名古屋製のものが好評を博し, それについて刺繍製品の売れ行きがよかったという。また大阪製の比較的安価な銅器, 静岡製の安価な漆器の売れ行きが予想に反してよく, 価格の高い屏風, 額類, 象牙製品, 七宝などの売れ行きは思わしくなかったという結果となり, 平山の報告が裏づけられている¹⁵。

外国の出品について平山は, イギリス・フランス・ドイツの「盛大なる出品」について報告したが, とくに婦人の衣服について, フランス館とイタリアの流行館 (Palazzo della Moda) (図7) の「種々の室内装飾又は郊外の景色等」



Esposizione Internazionale 1911. Palazzo della Moda. 図7 流行館 (Palazzo della Moda)

を「パノラマ式」に造った「陳列方」を「意匠を凝らした」ものとして高く評価した。それは、「蠟細工の等身の人形に各種の流行服を着せたものを配置し且つ電灯を装置して美観を呈せしめた」もので、「観覧人に対しては単に出品の衣服のみを見せるよりも一層の興味を感じしめた」というものであった。

博覧会の出品全般の意匠については、とくにヨーロッパにおける応用美術品や一般の家具類における形状と装飾にみられる変化が報告されている。平山によれば、形状については、従来のヨーロッパにおいて「一般に行はれた所の形状は重に希臘又は羅馬時代の形状から変化し来つた所の所謂西洋式」であったものが、トリノ博に出品された陶磁器等の形状では、「純然たる西洋式のものゝ殆ど稀れであつて東洋式即ち日本若は支那風の簡單なる形状が一般に行はれて居つた」と、とくに「簡單な形状」への変化が指摘された。

装飾については、「従来普通に行はれた所の規則正しい所謂レネサンス式の如き模様は極めて稀れであつて矢張日本若は支那風に類した稍不規則なる半ば写生的半ば模樣的というやうな装飾が多く応用されて居りました」と報告された。その模様の着色については、「余り濃厚な色でなく落附いた淡白の色」が主として用いられていたという。一般の家具類の様式についても、「以前とは余程變つて居るやうように思はれました」として、つぎのように、その形式が「簡單」になったことが報告された。

従前の西洋式の家具は多くは彫刻を施し又椅子卓子等の脚部には数段に削り形を施したやうな複雑なる形式のものでありますが現今は一般に其形式が簡單になつて居つて豊富なる彫刻又は削り形等を施したものは殆ど流行して居りません、是れは單に博覧会の出品のみならずホテル等に於て其客室又は談話室などに新に具へ附けられる所の家具類を見ましても概して皆簡單なる形式のもので行はれて居るのであります

さらに平山はガラスを使用したテーブルについて、つぎのように報告している。

近来は卓子の甲板にガラスを応用したものが行はれて居りました、即甲板の全面に厚い硝子板を貼附して鋸の類で止めたもの或は甲板の周辺に縁を存して其内面に硝子板を嵌め込んだもの等です

こうした板ガラスを用いた家具を平山は、「是等は装飾としても実用としても至極好い趣向のものと思われまゝ」と高く評価した。

また平山は、ヨーロッパの製品が「簡單なる形式のもの」であるにもかかわらず、「頗る変

化に富で居つて同じやうな形状が多数に並で居るといふやうなことは殆どなかつた」とし、これに比較して、日本の製品の形状は「殆ど千編一律で変化に乏しかつた」として、これを遺憾とした。また「其模様柄は概して細密に過ぎるやうに思はれました」と率直な感想を述べて、日本の製品の意匠図案について、これらの点を改善すべきと厳しく指摘した。

とりわけ輸出向きの製品について平山は、別の論説¹⁶においても、流行の変化への対応と改良すべき日本製品の欠点をくり返し述べている。そこでは、輸出先の「国民の趣味志向に合体すると云ふ事」は、「変化常なき流行」があつて極めて困難であるが、「流行に後れざらむ事を努むること」が重要であり、「日進の流行」の調査研究のために「意匠図案家等の専門家」の貿易国への派遣が必要だと強調された。そして、「伊太利の万国博覧会に行つてみたこと」とことわりながら、「出品物中日本品は概して好評を博した」と感想を述べ、「最も売れ行き良きものは純粹の日本風の製作物であつた」と強調した。そのうえで、「日本品の欠点」として、「製品の形状が甚だ単純で直線的であること」、形状における変化の乏しさ、そして細密すぎる図案などがくり返し指摘された。

以上のように日本製品の輸出貿易を振興するために意匠図案の改良を訴えた平山は、また「西洋人の我が国の製品に対する趣味は近来著しく変化したやうに思はれる」と述べ、「西洋各国に於いて種々の美術的制作品を日本風及び支那風の真似を為出したこと」にも注意しなければならぬと強調した。そして「意匠図案の方面に於いて新規なる考案を施すこと」の必要性を強調し、つぎのやうに振興策を述べた。

形状の上に於ける着想を第一とし、模様の新考案を以て第二とし、常に輸出先の趣味嗜好及び流行の推移を見逃す事なかつたならば、輸出貿易の振興を来す上に多大なる効果を奏するに相違ないと信ずる。

このやうに、形状と模様の問題にくわえて、「趣味嗜好及び流行の推移」への観点を強調する平山の主張は、トリノ博の会場のみならず、ウィーンへの旅行に代表されるやうな博覧会場外でのヨーロッパ製品についての直接的な体験にもとづいていたといつてよいだろう。以上のような問題点の指摘とその改良策を平山は大正元年（1912）第六回商品改良会の審査長として繰り返しているのである。

5 第六回商品改良会における平山英三の出品講評

商品改良会は、明治43年（1910）に農商務省商品陳列館において玩具の図案を対象に第一回が開かれ、大正2年（1913）の第七回まで同館で開催されたが、平山は第一回と第六回

の商品改良会の審査長を務め、審査成績を報告している¹⁷。第二回は明治43年（1910）に、錠前金物・鍍金品・装身具などを指定物品にして開催され、第三回は明治44年（1911）に、象嵌・寄木・貼木・彫刻・曲木など木工製品、第四回は同年に、刺繍・造花・押絵・摘み細工・レースおよびドロンオークなど、第五回は、翌明治45年（1912）に、「農家其他に於ける副業の普及発達」を計るために「農家其他の副業に依り製作又は加工したる海外輸出向の商品」が出品種類とされ、第七回は、皮革製品ならびに擬革紙布製品が選定された。第二回から四回までの審査委員長は松岡寿であった¹⁸。

平山が審査長となった第六回商品改良会は、大正元年（1912）11月1日から同30日まで、「輸出向の陶磁器、漆器並に客室用洋風家具に应用すべき意匠図案」を募り、優秀なものを選定して輸出用商品を改良することを目的にして開催された。こうした商品の選定理由は、開催の趣旨¹⁹によれば、国内外の商品需要の変化についての認識にもとづいていた。すなわち「近時世界に於ける嗜好の向上は益々新意匠の商品を歓迎するに至り、その応用の範囲拡大し、従つて欧米工業界に於ける其研究の盛大なるは実に驚くべきもの」があり、「我邦に於ても亦意匠図案に应用せられたる輸出品年々増加し、意匠図案の研究応用の如きも、多少見るべき跡なきにあらざる」ものの、「欧米工業界に於ける図案応用研究の程度に比すれば、尚且遺憾なき能はず」という認識と、「我邦の特産たる漆器及図案応用品中輸出額の多きを占むる陶磁器並に近時漸く内地に於いて需要を増加せんとする洋風家具の図案」の必要性に関する認識であった。

以上のような趣旨にもとづき、報告書には、出品図案についての平山による講評にくわえて、京都高等工芸学校教授武田五一の「図案製作上の根本問題」と題した講話が掲載され、「日本趣味の陶器製造を以て著名なる米国ロックウッド製陶所の現況」が紹介された。さらに、明治期の陶磁器と漆器の生産・貿易・意匠について図版入りで、その変遷を概観した記事²⁰とともに、日本国内における西洋家具の需要の増加を指摘した記事²¹が掲載された。とくに西洋家具については、「洋風建築の流行と共に近年益々増加の趨勢にあり」との状況が指摘されながら、洋風家具の種類が詳細に解説されるなど、洋風家具に注目があつまっていたことが読み取れる。その解説では、つぎのようにアール・ヌーヴォーにつづくセセッション様式の洋風家具の流行が紹介されていた。

現今家具店に陳列せられつつあるものを見るに、彼の一時仏国に於て行はれたるアルヌーボー様式に代り、近時独逸に其流行をなし欧米一般に伝播せるセセッション様式に則りたるもの多きは之れが一証をなすべし。

さらに、日本国内での流行の理由が、つぎのようにセセッション様式の特徴と結びつけられながら説明された。

蓋し此様式は我邦固有の直線的建築に恰当し、且つ着色は濃艶なるを避け多くは素地の儘を用ひ、彫刻を用ゆるを少なけれど、若し用ゆることの止むを得ざる時は、繁稠なるよりは寧ろ瀟洒なるを択む等、総て淡薄なるを尚ぶの点が克く本邦人の趣味に合致したるを以て、特に歓迎せらるるに到りしものならんか。

改良会へ主品された洋風家具の図案数は 25 点、漆器は 93 点、陶磁器は 176 点であり、出品総数は合わせて 294 点であった。これらのなかから、一等賞金牌 1 名、二等賞銀牌 9 名、三等賞 20 名が選出され、一等賞（図 8）と二等賞の図案が報告書に掲載された²²。平山は、その講評で、全体の図案を通じて、「佳作の採るべきもの」はあるものの「一頭地を抽いたる所の傑作と称すべきもの」はなかったと結論し、「一概に輸出品と申しまして其行き先きによって嗜好も一様でない」と指摘し、「夫れ夫れ嗜好如何を研究して、之に適応すべき意匠図案を応用するとういふことの必要なること」を訴えた。そして、つぎのように模倣をいさめた。

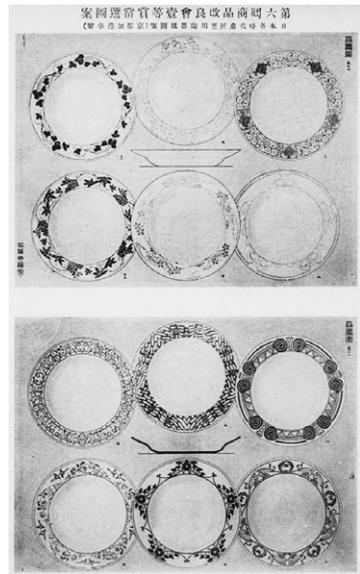


図 8 一等賞図案

単に外国品を模倣するといふことは避くべきことであつて、何処までも日本固有の性質を失はないやうにして、且つ外人の嗜好に適し需要に当て嵌まるやうにするといふことが図案家たる者の大に注意すべく又研究すべき点であらうと思ひます。

陶磁器の図案については、「多くは専ら裝飾模様の上に於て趣向を凝らして居つて、特に大体の形状といふものに意匠を凝らしたものは極めて少数でございます」と指摘され、「形状の意匠としては概して殆ど観るに足るものがなかった」ことが遺憾とされた。これは、平山によれば、「単に裝飾といふことのみを重を置いて其形状と実用の關係に就て注意の至らなかつた結果であらう」ということであり、平山は、形状と物品の実用との關係こそが「形状の上」に於て最も必要とする所」だと強調した。

漆器の図案については、平山は、「所謂ヌーボー式に類する模様を蒔絵に應用した図案」を

「其の出来栄上漆器には適当しないもののやうに思はれます」と率直に批判した。

洋風家具の図案については、「其の出品の種類は棚の図案が最も多く、其他には椅子、卓子、置物台、屏風等の図案」であると指摘したうえで、これらの「意匠は概ね皆近來流行の所謂セツセツシヨンとかいふ様式に属する」もので内地でも流行し歓迎されているが、純西洋式で日本固有の趣がないことを指摘し、「単に外国式に則つたのみでなく、其の形式に於て又は裝飾に於て多少日本固有の性質を帯びさしむることが必要であらう」と強調した。このように当時の日本国内で普及していたセセツシヨン様式の応用や模倣を批判しながら、輸出先の趣向に適應した意匠図案の応用とともに「日本固有の趣」を主張する平山の講評には、トリノ博を通じて直接体験したヨーロッパの家具・応用美術品の形態・裝飾・色彩における様式の変化ならびに流行の推移に関する認識が反映されていたといえよう。

6 おわりに

平山の日記には、ウィーンにおける安田禄造との具体的な会話の内容は記録されていない。また当時のウィーンの動向について、自然史博物館や美術史博物館などの代表的な公共建築についての記述はあるものの、ヨーゼフ・マリア・オルプリッヒのセセツシヨン館、オットー・ヴァグナーの郵便貯金局、あるいは、裝飾の排除を主張したアドルフ・ロースなどへの言及もみられず、ヨーゼフ・ホフマンやコロマン・モーザーらが指導したウィーン工房についての言及もない。トリノ博の開催当時 *The Studio* 誌²³ が、トリノ博において「議論の余地のない成功を取めた」と高く評価した、民族主義的様式が色濃いハンガリー館についても、また同誌²⁴ がローマの美術博覧会場において、その「白亜の大理石のエントランスからすべての部屋を通じてひとつの不協和音もない」と形容したホフマンの計画によるオーストリア特別館²⁵ についての言及もみられず、その館内に展示されたクリムトラの作品についての言及もない。

しかしながら、トリノ博を通じて、とりわけウィーンにおいて、平山は、1870年代の留学時代に体験した歴史主義的な様式にもとづく裝飾から脱却し、アール・ヌーヴォーとセセツシヨンの運動を経て、さらなる斬新な様式に進もうとする建築を含む応用美術品に関する意匠の変化を直接感じ取ったとみてよい。平山のトリノ博を通じての経験においてもっとも重要なのは、こうした変化への認識であったといえよう。平山は、おそらくは、このような変化についての対応策を教え子の安田禄造と語り合ったのではないだろうか。ウィーンから帰国した安田禄造が大正5年(1916)から翌年にかけて発表した経済的工芸の主張²⁶ は、トリノ博における平山のヨーロッパ体験の延長線上に位置づけることができるのであり、トリノ博後に発表された平山の論説は、安田の主張が1910年代後半の日本で受容される基礎のひ

とつとして見逃すことはできないのである。

註

- 1 緒方康二「明治とデザイン ― 平山英三をめぐる ―」『デザイン理論』第21号 昭和57年(1982) p.38
- 2 平山英三の日記については、その複写を緒方康二氏より提供していただいた。
- 3 伊太利万国博覧会出品協会『伊太利万国博覧会出品協会事務報告』大正元年(1912) pp.159-175
- 4 註3前掲書。写真版挿入86。報告書に挿入された写真版の「チュラン博覧会広告図案 其一」(図1の右)には以下のように記されている。
ESPOSIZIONE INTERNAZIONALE DELLE INDVSTRIE E DEL LAVORO TORINO 1911
同じく「其二」には、以下のように記されている。
TORINO APRILE-NOVEMBRE 1911 ESPOSIZIONE INTERNAZIONALE DELLE
INDVSTRIE E DEL LAVORO PER IL 50^o ANNIVERSARIO DELLA PROCLAMAZIONE
DEL REGNO D'ITALIA
- 5 『伊国羅馬市及チュラン市ニ於テ万国博覧会開設一件』に収められている規則書(REGOLAMENTO GENERAL, GENERAL RULES)によれば、「羅馬万国美術博覧会」のイタリア語表記は、L' ESPOSITIONE INTERNATIONALE D'ARTE, 英語では、INTERNATIONAL ART EXHIBITION である。
- 6 農商務省編『新古美術品図録：伊太利万国博覧会出陳』明治44年(1911)
- 7 Guida Ufficiale dell' Esposizione Internationale: Torino 1911. Nd.
- 8 註3前掲書 p.323
- 9 日記によれば、農商務省のトリノ出張事務所は、ベルトレット街より一区画南のシルピオ・ペリッコ街24番地(Via Silvio Pellico 24)のカーサ・ブレンジーニ(Casa Blengini)に入居していた。また出品協会の事務所はベルトレット街42番地(Via Berthollet 42)のカーサ・フラポリ(Casa Frapolli)に入居していた。
- 10 平山のローマ滞在については以下のものを参照。
天貝義教「明治44年(1911)羅馬万国美術博覧会と平山英三」『秋田公立美術大学研究紀要』第3号 平成28年(2016). pp.3-14
- 11 天貝義教『応用美術思想導入の歴史 ― ウィーン博参同から意匠条例制定まで』平成22年(2010) p.157
- 12 オーストリア帝国内の工芸専門学校については以下の記事がある。
A.S. Levetus, The Crafts Schools of Austria. The Studio, Vol.35, 1905. pp.201-219
ウィーンのクンストゲヴェルベシュエレについては以下のものがある。
A.S. Levetus, The Imperial Arts and Crafts Schools, Vienna, The Studio, Vol.39, 1907. pp.323-334
ウィーン工房については以下ものがある。
A.S. Levetus, The “Wiener Werkstätte”, Vienna. The Studio, Vol.52, 1911. pp.187-196
「美術工業博物館」については以下のものがある。
A.S. Levetus, Arts and Carafnts at the Austrian Museum for Art and Industry, Vienna. The Studio, Vol.55, 1912 pp.28-38.

- 13 A.S. Levetus, The Imperial Arts and Crafts Schools, Vienna, The Studio, Vol.39, 1907. p.329
- 14 平山英三「伊太利万国博覧会視察談」『工業所有権雑誌』第8巻 第5号 明治45年(1912)
pp.1-8 その他に以下のものがある。平山英三「伊太利万国博覧会の概況」『大日本窯業協会雑誌』第239号 明治45年(1912) pp.441-446
- 15 註3前掲書 p.399
- 16 平山英三「輸出振興策としての図案の改良」『工業所有権雑誌』第10巻 第4号 大正2年(1913) pp.23-25
- 17 平山英三「第一回商品改良会審査報告」『農商務省商品陳列館報告』第26号 明治43年(1910)
pp.35-44
平山英三「第六回商品改良会出品講評」『第六回商品改良会報告』大正2年(1913) pp.11-16
- 18 松岡寿「第二回商品改良会出品講評」『農商務省商品陳列館報告』第34号 明治43年(1910)
pp.55-59
松岡寿「第三回商品改良会審査成績報告」『農商務省商品陳列館報告』第40号 明治44年(1911)
pp.8-10
松岡寿「第四回商品改良会審査成績報告」『第四回商品改良会審査報告』明治45年(1912) pp.9-12
松岡寿「商品改良会出品概評」『建築工藝叢誌』第1巻第2号 明治45年(1912) pp.29-31
- 19『第六回商品改良会報告』大正2年(1913) p.1
- 20「明治年間に於ける製陶業の変遷」同上書 pp.29-44, および「明治年間に於ける輸出漆器の変遷」同上書 pp.45-57
- 21「本邦に於ける西洋家具需要の趨勢」同上書 pp.58-65
- 22 一等賞金牌と二等賞銀牌の受賞者は以下のとおり。
金牌 日本各時代意匠応用陶器皿図案 京都 加藤卓爾(図8)
銀牌 蒔絵手袋箱図案 東京 藤村彦四郎
同 蒔絵葉巻入図案 同 前田健二郎
同 客室用隅棚 島根 山根猶一郎
同 陶製菓子盛器図案 群馬 伊井弥之助
同 上絵模様肉皿図案 愛知 日野厚
同 陶器額皿図案 京都 清水六兵衛
同 漆器鏡附香水棚図案 静岡 花盛武司
同 磁器肉皿図案 佐賀 角吉平
同 蒔絵手袋箱図案 東京 松元末男
- 23 Alfred Melani, Some Notes on the Turin International Exhibition. The International Studio, Vol.53, 1911. p.289
- 24 Studio Talk, The International Studio, Vol.45, 1925. p.74
- 25 ROM 1911 Internationale Kunstausstellung Österreicher Pavillon nach Plänen von Architekt Professor Josef Hoffman, n.d.
- 26 安田禄造『本邦工芸の現在及将来』廣文堂書店 大正6年(1917)

図版出典

図1・図4・図5：『伊太利万国博覧会出品協会事務報告』より

図2・図3・図7：Guida Ufficiale dell' Esposizione Internationale: Torino 1911. Nd. より

図6：平山英三の日記より

図8：『第六回商品改良会報告』より

研究にさいしては、科研費（課題番号 26350015）の助成を受けた。

Hirayama Eizo and the Turin International Exhibition 1911

AMAGAI, Yoshinori

Retiring from the department of industrial design in 1907, Hirayama Eizo was dispatched to the International Exhibition held in Turin, Italy, as the head of the Japanese Exhibition Committee in 1911. During the exhibition, he made a short trip from Turin to Vienna, where he learned firsthand about many industrial products and furniture, which were based on the new European art style. In his articles on the Turin International Exhibition published in 1912, Hirayama reported that the style of many European products showed the change from the traditional Western art style derived from Greek and Roman style, which was based on Historicism, to the new style, which was characterized by Japanese-style or Chinese-style, especially by simple form, irregular ornamentation, and soft color. And moreover, reporting that new European furniture had shown the change from the complex form with carving to the simple and plain form, Hirayama criticized Japanese industrial designers for being all too particular about the details of ornamentation. In his article on the improvement of Japanese goods published in 1913, Hirayama advised Japanese industrial designers to move beyond *Art Nouveau* and *Secession*, which had spread quickly throughout Japan, and to design new Japanese ornamentation, and he finally defined that the industrial designer should refine and elaborate not ornamentation but form to elevate the aesthetic value of useful products for daily life. Hirayama's criticism played an important role in developing Japanese design ideas in the second half of the 1910s.